

第28号 通巻第6巻第2号

1986年8月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター

TEL 0775-85-4397

〒524-02

守山市服部町2250番地

はじめに

梅雨も去り、8月に入って夏本番、というところですが、強い日差しの中で汗をふきながら、堅くなった土を掘り起こす作業はつらいものです。しかし土の中から珍しいものや変わったものが出てくることを期待しながら、全員一丸となって発掘調査を進めています。

特別展のお知らせ

市立埋蔵文化財センターでは、61年度の第2回特別展を開催します。内容は次の通りです。

記

開催テーマ	「石と古代の暮らし」
開催期間	昭和61年8月10日(日)～24日(日)
場 所	守山市立埋蔵文化財センター
開館時間	午前9:00～午後4:00

センターでは昭和56年に石器をとりあげて特別展を開催しましたが、以後今年までの5年間に、新しい資料が出土しています。今回は、前資料とあわせて「石」が暮らしの中でどのような形で加工され、利用されていたかを知っていただくものです。石は古代の人々が使用してきた中で、今私達の目の前に土器とともに当時の形を伝えてくれます。夏休みの期間中、是非どうぞ。

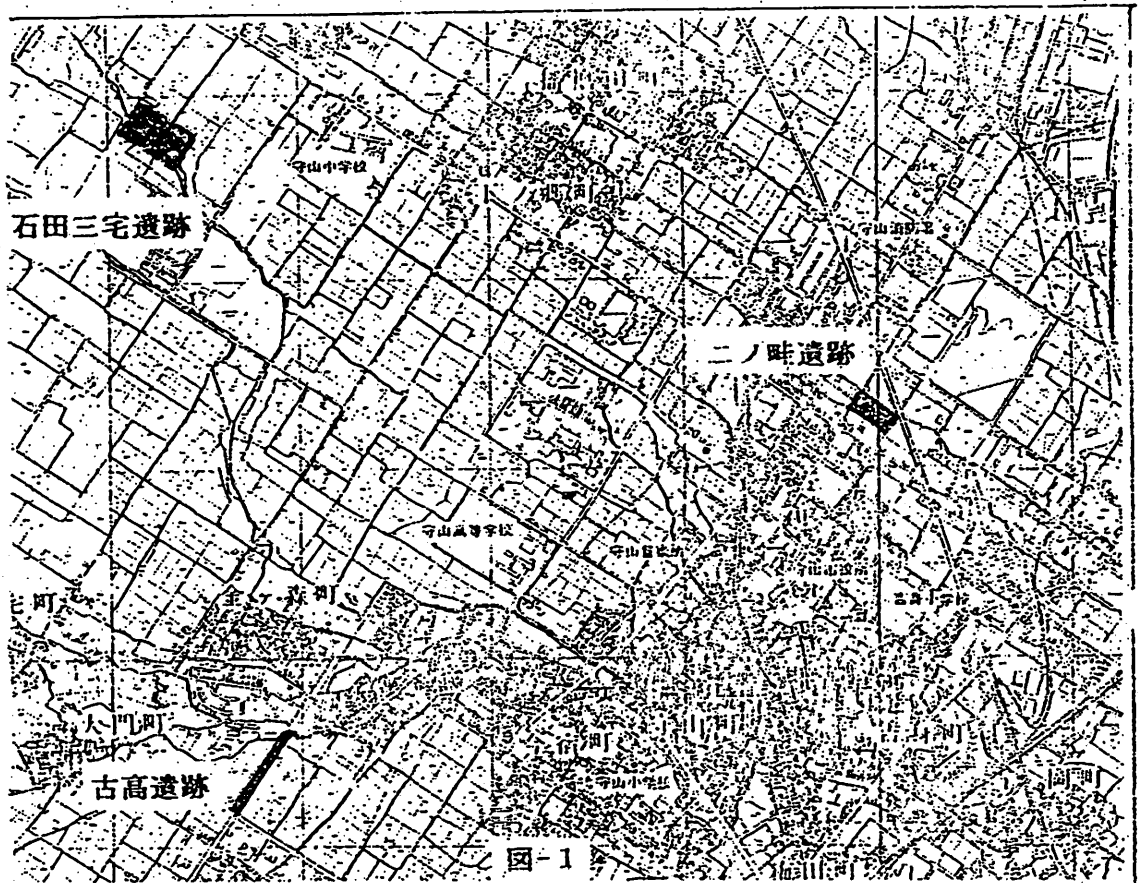
発掘調査だより

調査は前号で紹介しました二ノ畦遺跡が終了し、新しく古高遺跡が始まりました。石田三宅遺跡をあわせて現在2ヶ所で調査中です。

石田三宅遺跡

4月から調査を行っている石田三宅遺跡はその後調査も進み、次第に成果をあげてきています。それではその成果の一部を簡単に説明したいと思います。

今回検出した遺構は平安時代(10C後半～12C)のもので、擬立柱式建物7



棟以上、井戸2基、溝、土壇等があります。建物は4間×2間、2間×2間、1間×1間など規模にばらつきがありますが、そのうち1棟は礎石や柱根（径約20cm）が存在している柱穴があり、その柱穴も大きく、しっかりしていることから、やや大型の家であったことがわかります。井戸は直径2m・深さ1.5mの素掘りのものです。溝では一辺約4mのほぼ正方形にめぐるのが注目されますが、未掘削のためその時期や性格等は今のところわかっていません。又これらの遺構をとり囲むように幅1mの溝が北東・南西方向に約28m、北西・南東方向に約45mとほぼL字にめぐります。この溝自体狭く、浅いのですが、これより外側では遺構は極端に少なくなり、この溝の性格を物語っているようです。その他には長径約15mの不定形の大きな落ち込みがありますが、これも未掘削のため時期や性格等は不明です。遺物は土師器皿、黒色土器碗、灰釉や緑釉の碗、そして瓦などが出土しています。

現在調査を実施している場所のすぐ近くに「見福寺」という小字名が残っており、当初は寺院の関連遺構も予想されましたが、現在までのところそれに関連したものは検出されていません。いずれにしても今回の調査で検出された平

弥時代の集落は天神川の自然堤防上に立地しており、その東の端が確認されたことになり、集落はこれより西にのびていることが予想されます。

石田三宅遺跡の調査は9月頃まで行う予定です。近くにおいでの方、興味のあるかたは担当者に気軽に声をかけてください。又、近く現場説明会の開催も考えております。その機会には多くの方のおこしをお待ちしております。

(宮下)

二ノ畦遺跡

さる7月15日をもって、二ノ畦遺跡の現地調査を終了しました。現地説明会を7月上旬に行いましたが、雨天決行という事態も災いして、現地を見学する機会を逃がした方も多いのではないかと思えます。そこで、整理作業中で不十分ではありますが、検出した遺構と遺物に関して、その概要を報告しておきたいと思えます。

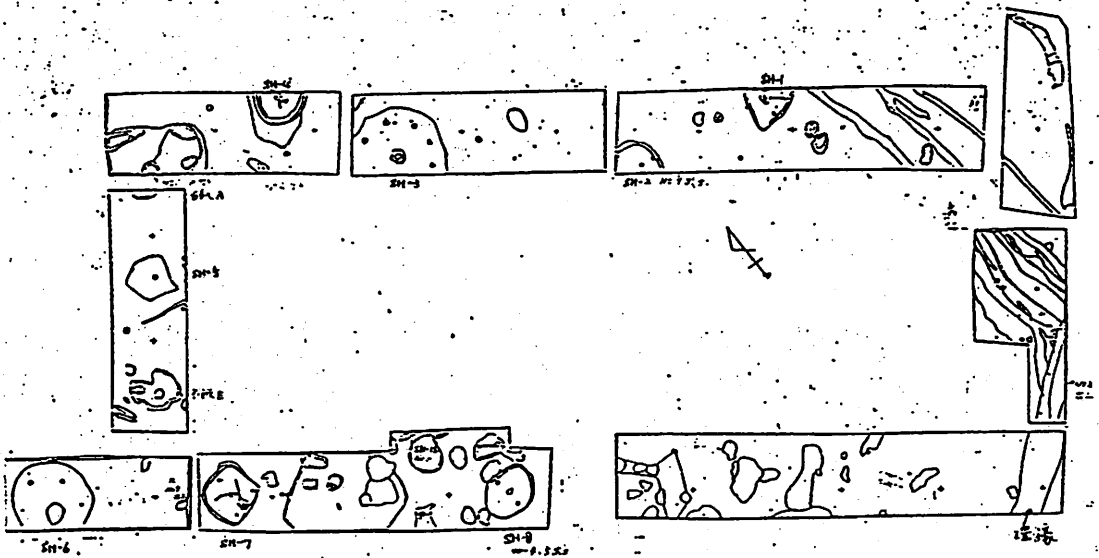
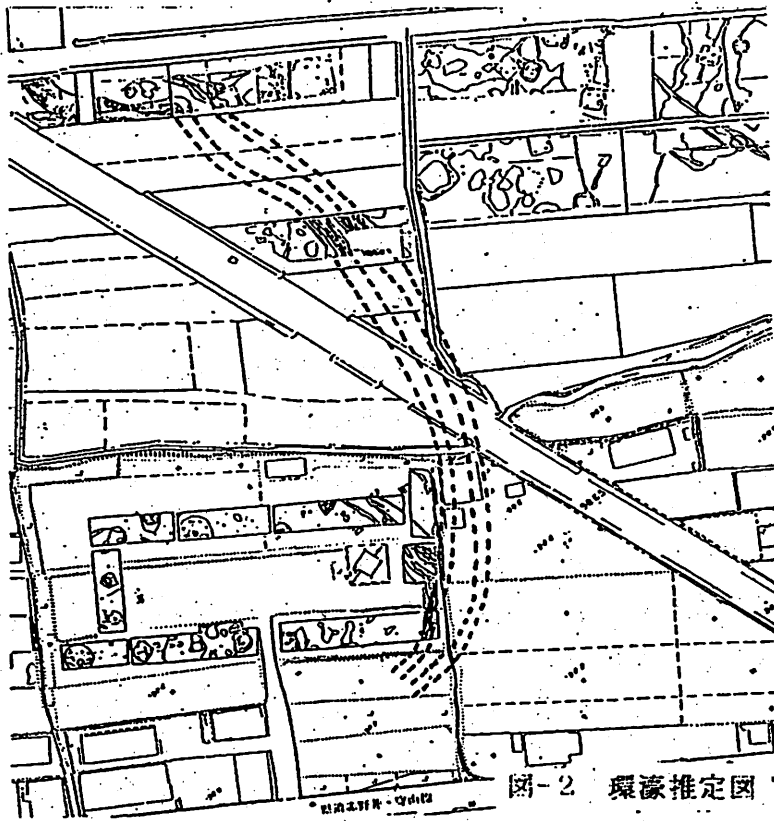
今回の調査では、弥生時代中期末頃の集落を検出しましたが、この集落の立地は旧野洲川の自然堤防上の微高地に営まれていたと思われれます。このような微高地は、播磨田町から金森町にかけていくつも形成されていたのですが、播磨田東遺跡、下之郷遺跡、吉身西遺跡、金森遺跡など近接する同時代のムラは、そのような立地に営まれていたのでしょうか。

検出した遺構と遺物

耕土、床土直下の地山（明黄茶色粘質土）上で、竪穴式住居跡8棟、土壇30基、溝9条、ピットを検出しました。調査区は、東から西にむかって、なだらかに傾斜しており、このような西向きに傾斜面上に集落が営まれていたのでしょうか。西側の調査区では、遺物包含層（黒褐色粘質土層）が地山上に約15cm程堆積していた上に旧耕土と旧床土が幾重にも堆積しており、徐々に現代のフラットな地形が形成されていったことがわかります。遺物は、各遺構や包含層から、遺物コンテナ（55×35×15cm）に12箱、実測可能な土器約200点、石器約10点が出土しました。

検出遺構

竪穴住居 円形住居4棟、楕円形住居1棟、方形住居3棟、計8棟を検出しました。各住居は、床面のふみしめもしっかりしており、一定期間生活していたことが予測されますが、住居跡の拡張、建てかえ、住居の重複がないこと、地山ブロックが肩から中央へ厚く堆積していたこと、床面にしっかりとした焼土面が少ないことや、遺物がほとんど検出できなかったことから、生活期間が短く、かつ意図的に集落を廃棄したものと思われれます。竪穴住居跡は、弥生時代の中期か



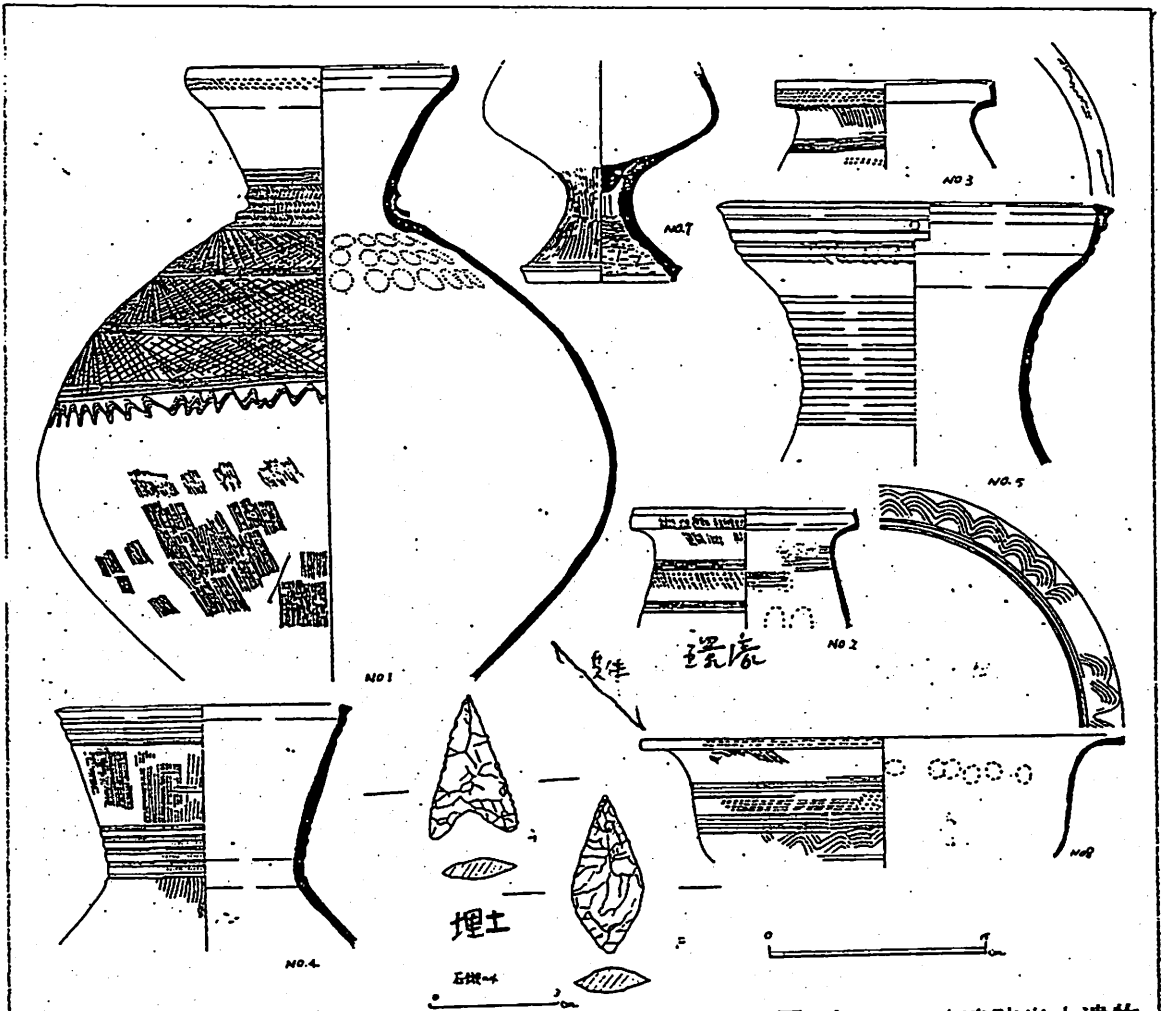


図-4 二ノ畦遺跡出土遺物

ら後期にかけて、円形から方形へと形が変化してゆきますが、円形と方形の住居跡が共存しているのもこの時代の特徴を示しています。

土 坑 約30基を検出しましたが、その形や掘り方から次の5つのタイプがあるようです。

- I 直径2～3mの浅い落ち込み。フラットな面をもち、中央に焼土が伴っています。
- II 直径約1mの楕円形の土坑で、深い椀状の掘り方を呈しています。遺物は、受口状の壺や高杯が遺構内に置かれた状態で出土しました。
- III 長さ1～2m、横幅約50cmの長方形の平面プランで、逆台形状の掘り方をしています。
- IV 直径約1mの楕円形の土坑で、焼土塊が厚く堆積していました。

V 不定形の浅い落ち込み (遺構とは思われません。)

IIやIIIのタイプの上城から多くの遺物が出土しました。

大 溝 調査区の東側において、上幅約3m、深さ約1m、断面U字形の溝を約20mにわたって検出しました。溝の堆積は、上層(灰白色砂層)・中層(黒褐色粘質土)・下層(黄褐色粘質土)の3層に分層できますが、水の流れていた痕跡は上層を除いて認められませんでした。遺物は最下層中においてわずかに検出されました。

溝 トレンチ1・2・8・9において南北方向にのびる溝を6条検出しました。灰白色砂層が厚く堆積しており、かなりの水が流れていたと思われる。遺物は須恵器片をわずかに検出したにとどまりました。

検出遺物

弥生式土器 壺・カメ・高杯・器台・鉢などIV様式(中期後半)の特徴を有する土器が主流を占めています。IV様式は、凹線文という装飾要素の発達した時代ですが、V様式(後期)は無文の時代といわれています。しかし、広口壺や高杯にV様式(後期)の特徴を有する土器がわずかながら認められるほか、受口状口縁カメという近江地方特有のカメでは、口縁部が垂直に近く立ちあがりはじめ、頸部のしぼりも強くなり、施文構成もV様式併行期の特徴を示しています。このように弥生時代中期から後期への様式の変換期に、受口状口縁カメがいちはやく反応していく点などは、その変革の主体が地域の中に内在していることを予測させます。

石 器 石ぞくが3点、砥石が6点、磨製石斧1点、石核(サヌカイト)1点が出土しました。石ぞくはすべて打製ですが、包含層や遺構覆土から検出されたもので、弥生時代中期の時代の資料かどうか不明です。いずれにせよ吉身西遺跡や下之郷遺跡で多量に検出された粘盤岩系(灰黄緑色粘盤岩、高島阿弥陀山産)の石器は1点も出上りませんでした。これはこの二ノ畦ムラが、高島産の石材を入手することができなかったのか、あるいは、この時期にはほとんど石器が消滅し始めているのかのいずれかではないかと思われます。(弥生時代中期と後期の大きな違いは、石器の有無ですが、後期になると畿内地方でも鉄器時代にはいったことが推定されています。)

二ノ畦ムラを特徴づける要素を列記すると、1. 集落の存続が極めて短期間であり、意図的に廃絶された。2. 遺構や遺物から、弥生時代中期末から後期

当初にかけての時期に限定される。3. 石器はわずかに残存するが、消滅し始めている。4. 半環状の大溝を有する集落であり、その内に住居が、外には墓域が想定される。などがあげられると思います。これらのことから、二ノ畦ムラが弥生時代のジャストモメントなムラの構成を知るうえで貴重な遺跡であることがわかってきました。 (伴野)

古高遺跡

守山南中学校の北側において、道路改良工事に先立つ調査を、6月27日から開始しています。改良工事面積4500㎡のうち約3000㎡を調査対象として、T-1～8までのトレンチ設定を行いました。現在T-1を中心に進めており、これまでの調査経過を報告します。(図-6)

T-1では溝、土壇と多数のピットを検出しています。まず北東から南西へのびるSD-1は、暗渠排水と同一方向で一部これに切られています。溝そのものはよく残っており、溝内からは黒色土器、土師器、陶器類が出土しました。SD-1は1m前後の幅をはかり、落ち込み状のところより羽釜1個体分

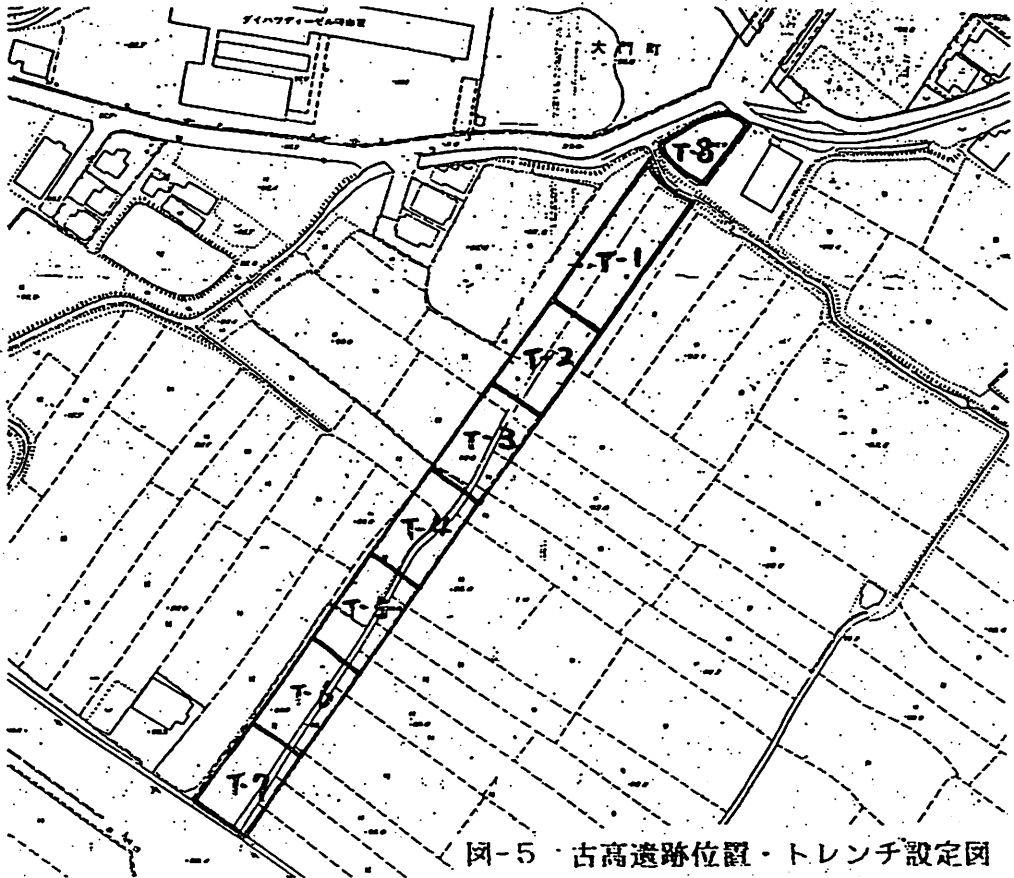
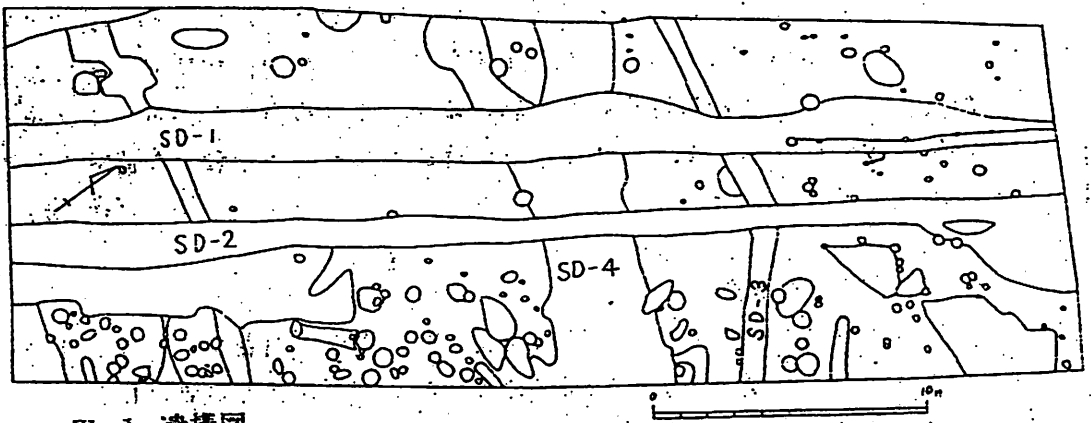
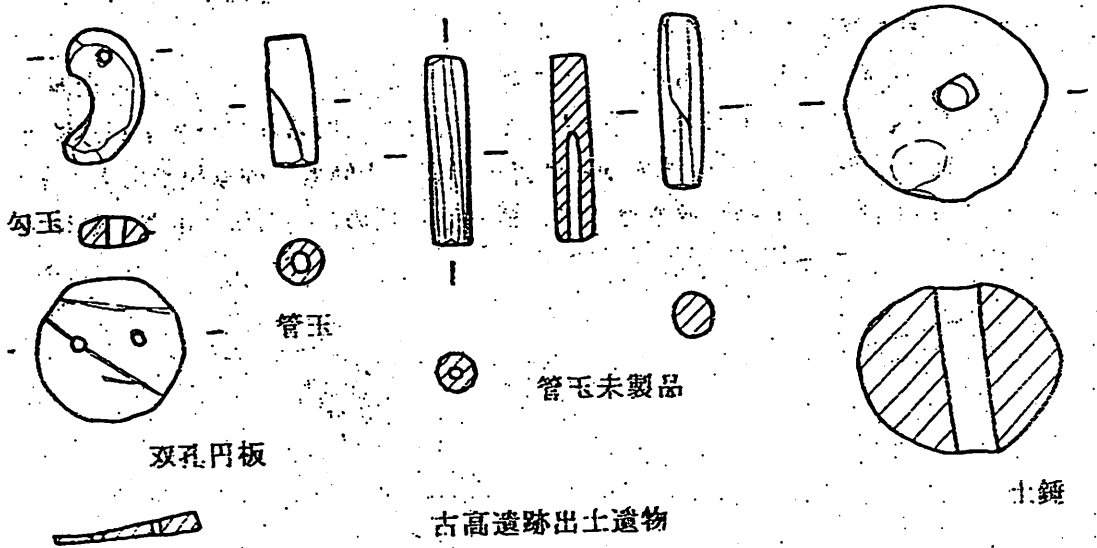


図-5 古高遺跡位置・トレンチ設定図



T-1 遺構図



と、少し離れたところから土師器皿、椀が集積して出土しました。この2条の溝に切れ、ほぼ直交した溝SD-3・4から滑石が出土しています。ただSD-3では細片のみでしたが、SD-4からは勾玉、双孔円板、管玉の製品、未製品と数多くの白玉、細片などがみつがっています。今後の調査が進につれ、さらに多くの玉類が出土してくるものと思われます。(堀本)

後記

今回の「乙 貞」は二ノ畦遺跡を中心に編集しました。7月12日の現説は風雨の強い日で、当初中止の予定でしたが、数名の考古学ファンが来られ、プレハブ内での説明会となりました。当日をたのしみにしておいでの方には残念でしたが、この「乙 貞」の紙面でその時の報告をいたしました。